

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

多様な声に耳を傾ける姿から 進路指導部のあり方を学んだ

宮城県仙台第二高校 大澤 健史 OSAWA TAKESHI

生徒の本質に迫り、隠れた可能性を見抜くために、データを深く読み込む。そして校内のさまざまな声に耳を傾ける。どんなに多忙であっても他者に対して常に自分を聞き続けた先輩教師からの学びを、大澤健史先生が振り返る。

校務の先の生徒を見る



32歳で県内有数の進学校の宮城県仙台第二高校に勤務するこ

とになった私は、教科指導以上に進路指導に不安を感じていました。それまでの赴任校では就職や指定校推薦入試の指導が中心で、模試の成績帳票の見方もよく知らない私に、難関大志望者の指導が出来るのだろうかと思ったのです。そんな私に、進路指導の基本を教えてくださいましたのが遠藤吉夫先生でした。私が着任した年、遠藤先生は進路指導部副部長を務めていましたが、授業で接点のない生徒の志望や長所までよく知ってい

ることに驚かされました。生徒の話題を耳にするとすぐに自分の手帳に書き込み、「この大学を勧めたい生徒は？」と誰かが問えば「それならこの二人」と即答するのです。

遠藤先生は進路指導部のさまざまな仕事を私に与えてくれました。私に出来ることといえば資料作成の手伝いなどでしたが、そうした地道な作業から私は多くを学びました。

一番覚えているのは、志望校検討会用の資料を作り替えたときのことです。学年団の議論がより深まるような資料を作るため、遠藤先生の考えを聞きながら、ときには先生特製のラーメンを夜食にすすりつつ、数週間にわたり新しいフォーマットに

データを入力していききました。

ある夜、一人の生徒のデータを見ていた時のことです。授業の理解が不十分だと私が感じていたその生徒が、実は少しずつですが成績が伸びていて、更にくっつかの教科では良い結果を出しつつあることに私は気付いたのです。私の印象とは異なる生徒の姿がデータから浮かび上がってきた瞬間でした。

興奮気味に遠藤先生に報告すると「知らなかったの？」と何を今更といった表情。生徒は私に気が付かぬ可能性を持っていることをその瞬間思い知らされました。そして、データを細部まで追うことでそうした生徒の姿が見えてくることを、遠藤先生との仕事から実感しました。

データの作り方に対する考えも変わりました。それまでは資料は同じ様式のほうが見やすいと信じていましたが、いつも同じ様式だと分析が形骸化することもあるのです。あえて別の角度から生徒に迫る資料を配布するなど、データを重層的に提供していく配慮も進路指導部として必要だと、遠藤先生の資料作りを見て学びました。

あらゆる校務の先には生徒がいる。当たり前前のことですが、常に意識しておくことは意外と難しいと私は思います。特に進路指導部の仕事は、教師と生徒の間をペーパーでつなぐことが多いため、多忙な時期は事務処理そのものが目的になってしまいがちです。担任がどんな発見

先輩教師の言葉

他者に対して
謙虚であることの
大切さを今伝えたい

宮城県白石高校 教頭
ENDO YOSHIO 遠藤 吉夫



大澤先生が
着任した当時、仙台第二高校の進路指導は過渡期にありました。豊かなノウハウはあるけれど、データをより現状に合ったものにする時期に来ていたので、私にとって大澤先生は、進路指導室で夜遅くまで議論し、一緒に作業をしてくれた大切な「仲間」でした。

進路指導は生徒の生き方にかかわるものです。だからこそ、いろいろな見方をするのが大切です。一人の教師として生徒と向き合いながらも、A先生の見方、B先生の見方も自分の中に蓄えていく必要があります。そうして初めて生徒の可能性を広げる指導が出来るのです。だから私は、情報が集まり

左 えんどう・よしお 国語科。宮城県農業高校、第二女子高校、宮城野高校を経て仙台第二高校に11年勤務。その後、教頭として白石高校へ。

撮影○仙台第二高校にて

右 おおさわ・たけし 化学科。宮城県亘理高校、角田女子高校（現・角田高校）を経て仙台第二高校に。今年度で赴任8年目。進路指導部副部長。

進路指導部の姿勢を学ぶ

「あの生徒が合格したの？」
を求めているのか、生徒は担任からどんな言葉をかけてもらいたいのか、そういう発想で資料を作り続けることで、仙台二高の進路指導を支えることが出来るのではないかと。進路指導部の副部長となった今、そんな自覚を持って仕事をしています。

と私たちが驚く場面は、少なからずあります。しかし、データをよく見ればそれは必然だったかもしれないし、もしかすると「やっぱり合格したか」と内心思っている教師もいるかもしれない。自分の知る生徒の姿が全てではないし、生徒は教師の想像を超える速度で成長することを、本校での8年間で学びました。諦めようとする生徒が

自分の可能性を再び信じられるか、それが進路指導の難しさでもあり、醍醐味でもあります。生徒のさまざまな可能性を見つけた遠藤先生ですが、それは他の先生の言葉に耳を傾けたから出来たのだと思います。夕方からは進路室で資料の作成に没頭する先生でしたが、昼間は教室や職員室で生徒や担任の話を聞き歩くのです。自分を常に

オープンにして、多様な声を受け入れる姿勢が進路指導部には必要だと先生から学びました。近年、自分に自信が持てない生徒が少しずつ増えていきます。生徒に「きみの力はそんなものじゃない」と確信を持って言うためには、自分の思いだけでなく、データと多くの教師の力が「必要だ——それが、私が遠藤先生から教わった進路指導です。」

やすくなるよう、周囲の先生が話しやすい状態に自分を置くことを心がけました。常に忙しく振る舞っていると周りの先生は話しかけてくれなくなるからです。進路指導部は情報を発信する機会が多くなりがちですが、聞き役に徹することも実は大切なのです。

東日本大震災によって私たちは自然の脅威を思い知らされ、人間にはコントロールできないものがあることを改めて認識させられました。震災を経験した私は、自分以外の存在に対して謙虚であることの大切さを、これまで以上に生徒に伝えるべきだと考えるようになりました。現代の教育はとかく発信力を重視しますが、他者の言葉に耳を傾けることが自分の成長に確かにつながっていくことを、生徒に気付いてもらいたいと思うのです。

人生には、自分の知恵や意思が及ばない瞬間が確かにあります。自分の弱さや小ささに向き合った上で、それでもなお一歩前に入る勇気を生徒に持たせ、後押しする。それが「3・11以降の進路指導」なのではないでしょうか。東北在住の一教師として、今強くそう思います。